

Self-Realization through Feelings : The Identity of George Eliot's Heroines

谷, 綾子
九州大学大学院人文科学府言語文化専攻

<https://doi.org/10.15017/26403>

出版情報 : 九州大学, 2012, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

| | |
|------------|---|
| 氏名・(本籍・国籍) | たに あや こ 谷 綾 子 (福岡県) |
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 文博甲第165号 |
| 学位授与の日付 | 平成25年3月26日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 人文科学府 言語・文学専攻 |
| 学位論文題目 | Self-Realization through Feelings: The Identity of George Eliot's Heroines (感情を通しての自己実現 —ジョージ・エリオットのヒロイン達のアイデンティティ) |
| 論文調査委員 | (主査) 准教授 鵜飼 信光 (副査) 教授 西岡 宣明 教授 小黒 康正 准教授 高野 泰志 |

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、George Eliot の登場人物における自己実現と感情の関係について考察した論文である。Eliot は社会の共同体を有機体と考えており、個人はその有機体を構成する部分の一部と捉えていた。現在、多くの批評家が、この有機体論に基づいて、自我と社会が相互依存的な関係にあることを指摘しているが、この自我と社会の相互関係を感情の観点から論じている研究は今までのところない。多くの批評家の意見に共通しているのは、社会を自己実現の手段として捉えているのではなく、社会を個人が背負うべき足枷として捉えている点である。本論文では逆に Eliot において個人の自我が社会に依存するのは、自己実現が感情の解放にかかっており、そしてその感情が他者との関係（つまり社会）や思い出（つまり歴史）の中でこそ生まれるものだからだと考える。本論の目的は、Eliot の登場人物達が、社会との関連を通して自己実現していく様子を感情の観点から迫っていくことである。

第一章では *Adam Bede* のヒロイン Dinah における自我の確立を、彼女が肉体の現前の必要性を発見し、有機体である社会の一員に組み込まれる過程から考察していく。Dinah は説教師として各地を放浪する生活を送っており、有機体である社会から浮遊した存在として描かれている。しかし確固とした自我を確立させ、自己実現に至るには、個人は有機体の一部として機能することが必要不可欠である。Dinah は Hetty や Adam との関係を通して肉体の現前の必要性を発見し、その同情心によって真に道徳的効果を発揮させるためには肉体的にもその人の側にいる必要があることに気づいていく。肉体の現前の必要性に気づいた Dinah は最終的に、説教師としての道をあきらめ、Adam と結婚し Hayslope に定住する。この結末は、彼女が放浪の人生を放棄し、一つの場所に定住することで、つまり有機体である社会の一部に取り込まれることで、Dinah の精神的な影響力を小規模ではあるが半永久的に周囲にもたらすことを意味している。ここに、社会という有機体に基づいた Dinah の確かな自我と社会との関係性を通して人間の力とも言える感情の力を発揮する Dinah の真の自己実現の形を見ることができる。

第二章では、*The Mill on the Floss* のヒロイン Maggie を通して、有機体である社会とそれを構成する部分としての個人の間には軋轢がありながら、それを受け入れることが感情の力を通じた自己実現につながることを論じていく。Maggie は自身の内部の欲望と外部の社会や伝統の間で葛藤するが、最終的に「許す」という概念に到達し、彼女は外界である社会や伝統をその欠点も含めて受け入れる。そして、社会に根差した確かな自我を確立させた Maggie は過去や外界を象徴する兄 Tom の彼女への反感をその強い感情の力によって覆し、二人は最後和解する。兄との和解の中に冷たい外界を象徴する兄をも覆す感情の力の強さと社会と最終的に調和した Maggie の確かな自我とを見

ることができる。

第三章では、Eliot の作品における感情と外部の有機体との関係を考察する。*Romola* では、社会と個人を結ぶ絆を社会の他のメンバーに対する「義務」の中に見出し、個人が社会における役割を果たす、つまり義務を果たすことで、その人間関係の中に感情の力が発揮されていくことが描かれている。*Romola* はフィレンツェの同胞や夫 Tito に対する義務を果たしていくことで、「感情」の力を発揮していく。*Romola* は最終的にその愛情や憐れみの力を持って、疫病村を再建し、また夫の愛人 Tessa やその子供たちを救うことで、壊れかけた共同体を再建する。この疫病村の再建という行為の中に *Romola* の感情の力による自己実現を見ることができる。

第四章ではヒロイン Dorothea に感情の土台といえる過去や義務がないことに注目し、彼女が父親的存在 Casaubon との結婚生活を通して感情の源泉たる過去や義務を相続し、確かな自我を築いていく過程を論じる。Eliot において個人の自我は社会や過去との関連性の中に確立されるものである。社会と個人の関連は個人における社会の他のメンバーである他者に対する義務の中に見出される。そして自己実現の鍵となる感情はこの社会や過去との関係性の中で生み出されるものなのである。しかし、Dorothea は感情の基盤ともいえる過去を持たない孤児である上に、有閑階級の婦人であるために社会の義務をも免除された存在である。Dorothea の自我の不確かさは彼女の自我が *sensuous self* と *spiritual self* の分離という形で見ることができる。父親的存在の Casaubon との結婚によって「義務」と「過去」を与えられた Dorothea は、恋のライバルである Rosamond を尚も救おうとする作品のクライマックスにおいて分裂した自我を統一させる。そして統一した強い自我を以て、Dorothea は社会の一員としての義務でもある「他者のために貢献する」という理想を果たし、自己実現を達成し、有機体における確かな自我を築いたのだった。

第五章では、ヒロイン Gwendolen が社会の負の側面を乗り越え、社会を構成する他のメンバーである他者との関係における利他的な感情の力に目覚め、確かな自我を形成していく過程を論じていく。*Daniel Deronda* で描かれている世界は貨幣価値が浸透した墮落した社会として描かれている。個が自我を確立するためには有機体である社会に基づかななくてはならないことはすでに述べたが、*Daniel Deronda* ではこの社会の腐敗面が問題となる。Gwendolen は Grandcourt との結婚後、社会の腐敗を体現する存在の夫の抑圧に苦しむが、Deronda は彼女が苦しんでいるのは自分のエネルギーをエゴという殻の中だけで消費しているからだと指摘する。Gwendolen は Deronda との交流を通して、利他的な感情の力に目覚めていく。彼女の利他的な感情の力は最後夫への殺意を乗り越え、Grandcourt の支配から解放されるところにも表れている。最後、Gwendolen は貨幣価値を越えた広い視点を持つようになり、その広い道徳的視点から Offendene に自分の故郷を再発見している。貨幣価値の枠組みを乗り越えた広い道徳的視野から有機体(共同体)における自分の位置を確認した Gwendolen は、有機体である社会に基づいた自我を見出すことができたのである。社会の腐敗を体現した Grandcourt の支配を乗り越え、故郷を再発見した Gwendolen の姿に、社会の腐敗した側面を乗り越え、健全な有機体であるよりよき社会の一員としての確かな自我の確立を見ることができる。

本論で考察してきたように、George Eliot の作品において個人は有機体である社会と結びつくことで人間の力である感情の力を発揮し、感情の力を発揮することで個人の自己実現を達成することができるのである。社会は個に課された足かせではなく、感情の力を発揮し自我を確立させるための媒介である。Eliot は社会が個人に課した義務という個人の限界を嘆く悲観主義的な作家ではなく、人間の力である「感情」の力の重要性を力強く主張した作家なのである。

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、19世紀のイギリスの女性小説家、ジョージ・エリオット (George Eliot) (1819-1890) の長編小説の五篇、『アダム・ビード』 (*Adam Bede*)、『フロス川の水車』 (*The Mill on the Floss*)、『ロモラ』 (*Romola*)、『ミドルマーチ』 (*Middlemarch*)、『ダニエル・デロンダ』 (*Daniel Deronda*) を取り上げ、登場人物における自己実現と感情の関係について考察した論文である。エリオットは社会の共同体を有機体と考え、個人はその有機体を構成する部分の一部と捉えていた。これまで多くの批評家が、この有機体論に基づいて、自己と社会が相互依存的な関係にあるとし、社会を個人が背負うべき足枷として考えてきている。本論文はこうした先行研究の趨勢を疑問に付し、エリオットの作品において個人の自我が社会に依存するのは、自己実現が感情の解放にかかっており、そしてその感情が他者との関係や思い出の中でこそ生まれるものだからだとする解釈を提示する。他者との関係は広い意味での社会であり、思い出も広い意味では歴史であるが、本論文は、エリオットの登場人物達が、そうした社会や歴史との関連を通して自己実現していく様子を感情の観点から解明し、意義深いものと評価できる。

第一章では『アダム・ビード』のヒロイン、ダイナにおける自我の確立を、彼女が肉体の現前の必要性を発見し、有機体である社会の一員に組み込まれる過程から考察している。説教師であったダイナは、嬰兒殺しで死刑を宣告されたヘティーを監獄で慰めるうち、人の傍にいたいという肉体の現前の必要性を発見し、最終的に、放浪する説教師としての道をあきらめ、アダムという男性と結婚する。この結末は従来否定的に捉えられてきているが、本論文は、彼女が一つの場所に定住し、有機体である社会の一部に取り込まれることで、彼女の精神的な影響力を小規模ではあるが半永久的に周囲にもたらすという、この結末の肯定的な意味を重視する。そして本論文はそこに、社会という有機体と自己との関係性を通して、感情の力を発揮するダイナの真の自己実現の形を見る。

第二章では、『フロス川の水車』が、ヒロイン、マギーを通して、社会と個人の間には軋轢がありながら、それを受け入れることが感情の力を通じた自己実現につながることを描いている、とする解釈が提示される。Maggie は自身の内部の欲望と外部の社会や伝統の間で葛藤するが、最終的に「許す」という概念に到達し、彼女は外界である社会や伝統をその欠点も含めて受け入れる。本論文はそうした社会と伝統の受け入れを、個人を束縛する足かせとして消極的にそれらが受け入れられているのではないと捉え、マギーがその積極的な受け入れによって社会に根差した確かな自我を確立させるのだと解釈する。そして、本論文は作品の結末を、社会や歴史を象徴する兄トムに対する反感をマギーが、確立された自我に基づく強い感情の力によって覆し、兄と和解するものであると捉える。

第三章では、15世紀のフィレンツェを舞台にした歴史小説『ロモラ』が取り上げられ、従来の研究で動物的な利己性を指摘されるティートという男性が、むしろ動物と関連する「自然」とは対極にある、感情の枯渇した理性、打算を象徴していることを指摘しながら、彼の妻で作品のヒロインであるロモラが、夫とは対照的に「自然」と感情を体現する人物であるとする解釈が提示される。この作品では、ロモラが一旦は社会を拒否することが描かれるが、本論文は、ロモラが放浪して行き着いた先の疫病村を再建し、またフィレンツ

エに戻った後、死亡した夫の愛人テッサやその子供たちを救うことで、壊れかけた共同体を再建することの意義を重視する。そうした他者への奉仕に自己の感情を注ぎ込むことでロモラが自己の実現を果たしていくことに本論文は作品の意味を見出す。

第四章では、『ミドルマーチ』ヒロイン、ドロシアに感情の土台といえる過去や義務がないことに注目しながら、彼女がカソーボンとの結婚生活を通して感情の源泉たる過去や義務を相続し、確かな自我を築いていくとする解釈が提示される。ドロシアは感情の基盤とも言える過去を持たない孤児である上に、有閑階級の婦人であるために社会の義務をも免除された存在である。しかし彼女は、失望に終わった結婚から、自分にはどうにもできない「他者」を実感し、そうした他者から成る社会への義務に目覚めていく。彼女の自我は官能性と精神性の二つの側面の間で分離して不確かな状態にもあったが、やがて、彼女は自らの官能性をも受け入れる。その受け入れで解放された感情を、他者への貢献へと向かわせ、ドロシアが社会という有機体の中で確かな自我を築くことを本論文は解明する。

第五章では、『ダニエル・デロンダ』のヒロイン、グウェンドレンが社会の負の側面を乗り越え、社会を構成する他のメンバーである他者との関係における利他的な感情の力に目覚め、確かな自我を形成していくとする解釈が提示される。グウェンドレンは結婚後、夫グランドコートに抑圧に苦しむが、デロンダという男性との交流を通して、利他的な感情の力に目覚めていく。本論文は、グランドコートをグウェンドレン自身の内部にある負の側面の象徴として捉え、彼の事故死を、彼女の利他的な感情の力が夫への殺意を乗り越えたことの表れと見る点に大きな特徴がある。最後、グウェンドレンは狭い利己心を越えた広い視点を持つようになり、その広い道徳的視点から自分の故郷を再発見し共同体における自分の位置を確認し、確かな自我を確立することを本論文は解明する。

エリオットの作品において、個人が社会と結びつくことで感情の力を発揮し、それによって自己実現を達成することができること、社会が個に課された足かせではなく、感情の力を発揮し自我を確立させるための媒介であることを、本論文は解明し、エリオット研究に、有意義な貢献をしている。個々の作品の解釈にも非常に優れた見解を提示しており、本論文は、博士論文としての水準に達していると判断される。